

PLAN75
(映画鑑賞のあとで…)

映画監督の早川千絵さんは、1976年生まれの49歳。

2022年の第75回カンヌ国際映画祭の「ある視点」部門で、新人監督に与えられる「カメラドール」の特別表彰を受賞した。作品は「PLAN75」という1時課52分の映画で、日本・フランス・フィリピン・カタールの合作映画。同年の第95回アカデミー賞では、国際長編映画賞の日本代表作品としてもエントリーした。また、国内でも、ブルーリボン賞(主演女優賞・監督賞)ほかいくつかの賞を授与された。

映画は、現代の日本を舞台にした仮想の話ではあるが……。

そもそも「PLAN75」とは何なのか。高齢化社会が極限に達したことから、国策として「高齢者に死を選択する自由」を与えようという計画を打ち出した。

75歳に達すると申し込むことができる制度で「PLAN75」と名付けられた。

このプランに申し込むと、一律に「一人10万円」の一時金が支給されて、種々の目的で有効に活用できる。そして…

衝撃的なシーンで始まり、「これから何が起きるのだろうか?」と観る人を引き付けるのだが、その後にスクリーンに登場する78才の老婆の表情に引っ張られて、冒頭のシーンの衝撃が薄らいでいく。老婆の名はミチさんと言い、ホテルの客室清掃の仕事をしているが、身寄り頼りがなく、団地で独り住まいをしている。職場の仲間と日々を楽しく暮らしていくことができているが、にじり寄る老化の中で、何とか一人で無事暮らすことができているというところだろうか。

老婆ミチさんを演じるのは倍賞千恵子。高齢になんでも舞台で歌う歌手として見る時には化粧もしていて実年齢よりも若く見えることが多いが、この映画の中では実年齢で、そのままの顔で登場している(メークが上手くてそう見えるのかもしれないが)。

どこにでもいそうな、ごく普通の老婆の日常が映し出されていく。

そこへ、国策として打ち出された「PLAN75」という制度が登場する。

コロナワクチン接種の時に見られたように、街角でチラシが配られたり、相談窓口ができたり、受付窓口ができたりと行政側の手厚いサービス体制が動いていく。

ひたすら無表情に行政施策を進めていく公務員、医療や介護の現場で働く若者や外国人労働者、様々なライフスタイルで日々を暮らす高齢者たちがスクリーンを流れていく。

老婆ミチさんと、PLAN75の相談員を務めるヒロムという青年と、介護現場で働く外国人労働者のマリアが交互に登場していく内に少しずつ先が見えてくる。

「PLAN75」の実際が少しずつ見えてきて、やがて終章に入るのだが、このままあらすじを書いてしまったら映画を見る人がいなくなってしまうので、この辺までにしておく。

世の中が今まま進んでいくと、こんなことは起きないのかもしれないが、これに近いことが消極的にでも打ち出される可能性はないとは言い切れない。

また世の中は、「高齢者と非高齢者」ばかりでなく、「勝ち組と負け組」「外国人と日本人」「男と女」など様々な視点で分断化したり対立したりする構造になる可能性を秘めている。

そんな中で私たちはどこを向いて、どう進まなければいけないのか。

高齢者の生き方や高齢化社会を取り上げた映画は各国で作られている。

1956年に発表された、深沢七郎作の短編小説「檜山節考」は1983年に映画化され、カンヌ映画祭でパルム・ドールを受賞した。とある田舎の過去の出来事が描かれたものだが、現実の世界では、「高齢化社会」は、まだ他人事の時代だった。

しかし今では、多くの観客にとって現実のものになってきており、この映画が社会に与える影響力は大きく、いくつかの課題を投げかけてくる映画だと感じた。

と、美しく書いてしまえばそれまでだが、正直なところ、途中で「恐怖」を感じた映画でもあった。

以上